

|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 建築幻想                                                                        |
| Author(s)    | 狩野, 忠正                                                                      |
| Citation     | デザイン理論. 2001, 40, p. 94-95                                                  |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/53202">https://doi.org/10.18910/53202</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

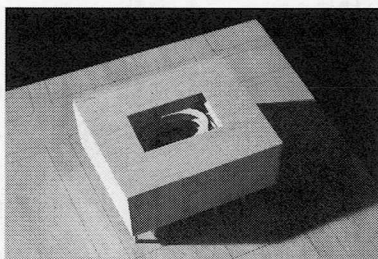
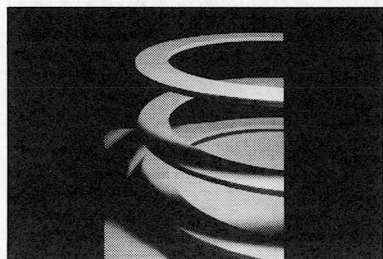
*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

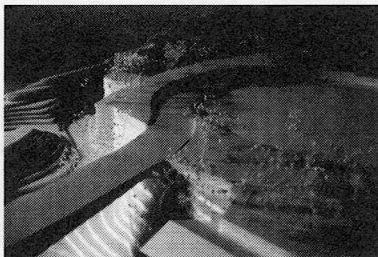
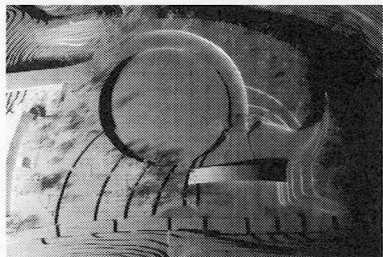
Osaka University

## 建築幻想

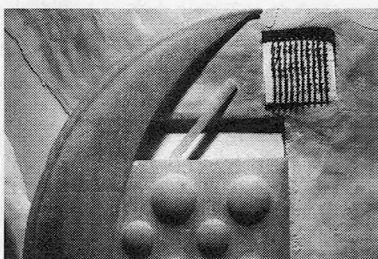
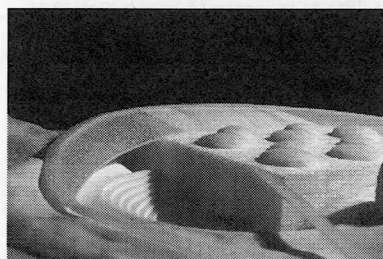
狩野忠正／大阪芸術大学



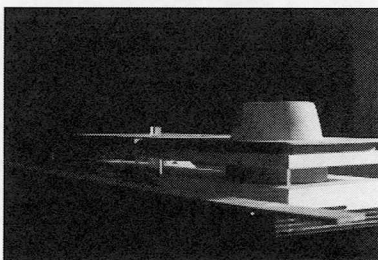
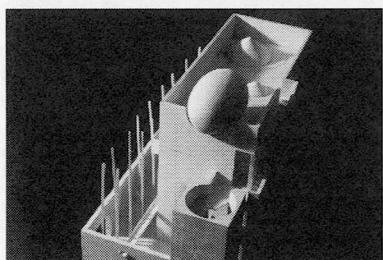
山陰に計画中の建築。  
神話の世界、おろち伝説からくるスパイラルである。スパイラルはDNAの形でもある。



周辺の山並みを池の中に映し込む。実像と虚像の反転。



屋根部分に太陽電池を設置。太陽の道を表し、原始への回帰を示す。



左：震災復興集合住宅を卵でシンボライズする。

右：深い底は鳥の飛翔を示す。7つの海に開かれた大開口、大階段を持つ神戸大学百年記念館。

9月11日、超高層建築の盲点をさらけ出してしまったニューヨークのワールドトレードセンターの爆破テロ事件は、建築に対する考え方を変えてしまうこととなった。建築の歴史は多くの創造と喪失を繰り返してきたが、今回の事件は21世紀を象徴する記憶となることは確かである。市民はそれまでマンハッタンの南地区に聳えていたツインタワーの風景を思い出し、その幻想を追いかけている。犠牲者の多さが深くかかわった建築の幻想をいやが上にも強烈にしている。うず高く残された瓦礫の下に眠る多くの死者は歴史の悲しみ、都市の無情そのものである。

この建築の設計者ミノル・ヤマサキは、この地で原型としての110階のイメージを膨らませたのである。イメージを創り出す行為と以前あったものを思い出す行為、そこには建築家と他者との立場の違いはあるが、ワールドトレードセンターの幻想としての建築には共通認識を持っている。建築は他者を内包してしまうのだ。ここで幻想は創造によるプレゼンスは「ファンタジー」(fantasy)であり、爆破、崩壊にあっては「イリュージョン」(illusion)にあたる。建築幻想は創造と喪失の境界を行き来し、それを繰り返しながらスパイラルアップしようとする行為にある。そして創造はfantasyに支持点を置くことを絶えず考えてきたことは確かである。

私がベルリンでの2年間の生活で思ったことはillusionとfantasyの交換である。ベルリンにあるブランデンブルグ門、ウィルヘルム・カイザー教会、フンボルト大学に刻印された銃弾の跡は幻想(illusion)である。それを眺めながら世界の建築家達は創造の力を貯えているのである。元の東西の壁があった近くに建設されたダニエル・リベスキンドのユダヤ博物館、レンゾ・ピアノ、リチャード・ロジャース、ラファエル・モネオ、磯崎新、

ヘルムート・ヤーンのポツダムプラザの建築群、ノーマン・フォスターの国会議事堂を見ると理解できる。ここで建築家はillusionをfantasyへと転換させたのである。このように建築幻想はfantasyとillusionの2面性をもつものである。illusionをfantasyへと変換させることが重要なのである。そのことが現実であり、歴史観の立脚点と言えるのである。歴史を見つめることで幻想は増幅される。歴史となる過去は確かである。そして過去しか当てにならないのである。創造の手がかりは歴史に頼るしかない。そして歴史への幻想を深めることでしか確かな空間を語ることはできないのだ。

今回のニューヨークの集団テロによる崩壊を見ればわかる。重要なのはそこからいかに歴史を意識するかにある。建築に限らず創造行為そのものが変わらざるを得ない。人類の歴史は同じようなことを繰り返してきたのだ。

地球上の行為である限り変わらないもの、それはその時にやってくるイメージなのである。イメージが増幅してものごとに定着し、空間の原理が創られ、この地上に定着させられる。幻想で終わるものもあれば、幻想を实体に定着させ完成まで至るものもある。その差はわずかである。そこで幻想で終わる行為にも意味を求めることが大切である。幻想で終わったからこそ、よけい影響力をもった作品も多くある。ミース・ファン・デル・ローエのベルリンフリードリッヒストラーセのガラスタワーにしても、ル・コルビュジェのモスクワパレスにしても然りである。幻想で終わることにより、その後強い影響を及ぼした。幻想が建築になるかどうかは、時代の運命のようなものである。しかしニューヨークの幻想はあまりにも深く重い。21世紀元年という歴史の接点に人類につきつけられた幻想そのものである。